



俳諧一葉集

一

5
4393
1



門 へ 5
4393
卷 1

~5
4393
1-9



いふは 勢多きや かの世に
れまねしとの 世に 未だ 勢多
名も 利の おの ちも 人
し ちの ちの 世に 乃 ち
き せられたる 幻 空 老人 飛 狐 小
精 心 ちの 世に 社 倉 の ち 成 立 した
也 ち 幾 句 附 句 作 ち 業 福 よ ち 業



昭和九年
七月二日
購求

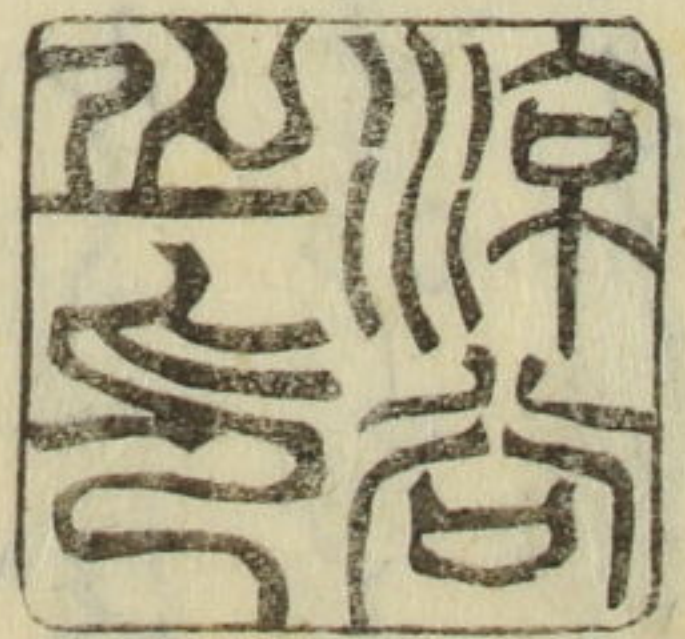
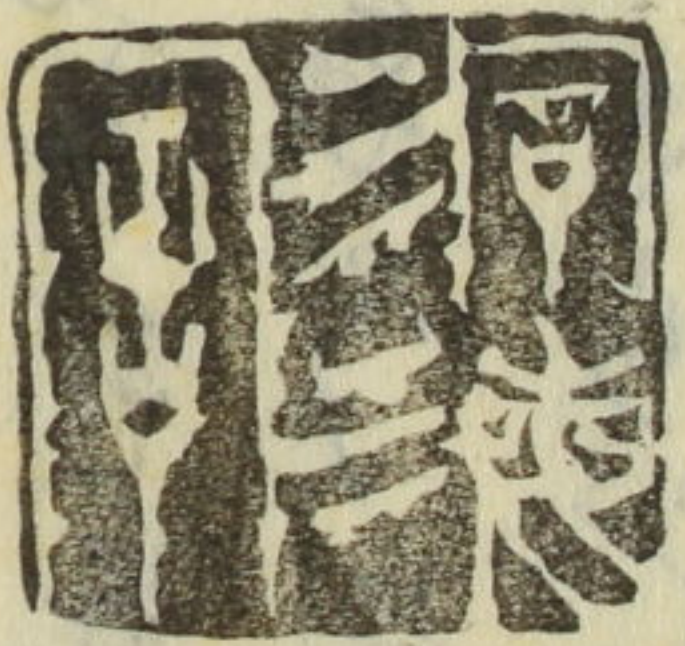
9-7-2

さくら月、其海濱をたそふり志は紅花
を地の方、日月の晴雨をあたふ事
をくみね、霧のひもたれ、まきの雲を
しらのくみちのくみち、院境のはら
をくみね、霧のひもたれ、まきの雲を
のくみちのくみち、院境のはら
をくみね、霧のひもたれ、まきの雲を
のくみちのくみち、院境のはら

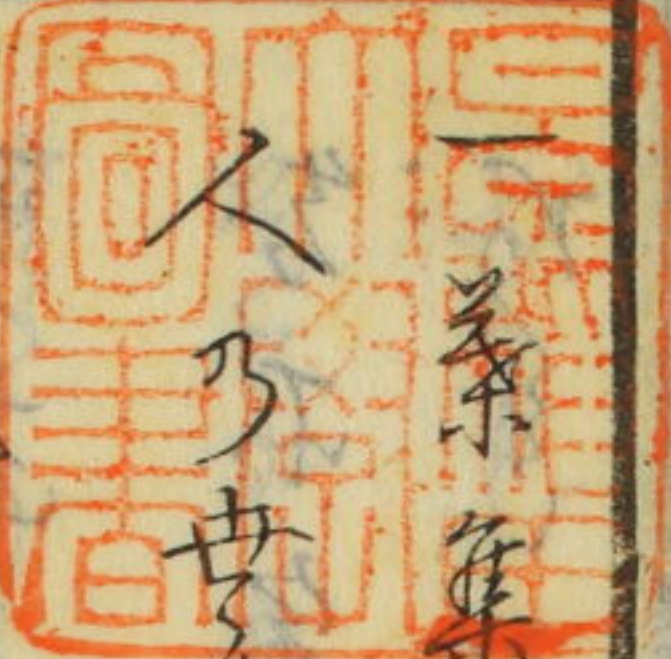
美物も久し、物と色、無き一、致
きり、これを、福、海、乃、さ、ま、の、も、ち
ふや、ま、ま、の、ま、ま、さ、ら、の、ま、ま、の、ま、ま、
あ、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、
川を、握、擲、し、の、ま、ま、の、ま、ま、
み、眼、中、精、気、す、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、
ら、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、

我ららの君子は年繁し毎夕
文政十一年丁亥冬月

洞海涼谷



一葉集叙



人の世に何れも時息の官の事を知るは
世もまた年月のゆくまはしに志を
らくし急ぎ急ぎを多のしみせ
とてや花月の夕形を介し
あひまやりのを哀れみしを
あまき友のよの辱しを
海を揺り被るるを忘るる宇内乃

際何れに樂ありて是もふかしくん今從ての
 是こしる此年をいしとやりの電多結
 此も乃大に起るは其のふりし其の
 武のの平の生まし富を拜しし公也
 其舊もいしを承りていしと久無のふり
 其未も其海内を編し是児を拜し
 其不第のふを結るていしと其の
 其いし其神祇をいしとの也夫しと

少し多し外に湖中子登くこの
 其も志し其世の人を志し其の
 其いし其いしを其いし其いし
 其いし久しく其をいし其いし其
 其いし其いしを其いし其いし其
 其いし其いしを其いし其いし其
 其いし其いしを其いし其いし其
 其いし其いしを其いし其いし其
 其いし其いしを其いし其いし其

あはれなる名をなるとなるのなを抄と
らあ

あはれなる名をなるとなるのなを抄と
らあ

南無

あはれなる名をなるとなるのなを抄と
らあ

俳諧一葉集序

花子あはれなる名をなるとなるのなを抄と
らあ

歌子も、おふ杜村山家集の傍をあたえて貞
孝の初幸付、めし狂句千餘冊の酒首を散一人
情を迷ひ千草一、又幸代記帳千、そまへて終千
道の神とゆふれあふ其体生あまう、四海にあふは
る丈も、たを御も知、椋郎と柳春を稱す門中
子國の子をあら、して其風を唱ふ、人幾手、いふ
数を、いふ所、志のれと、厭を看る胃をあたふ
大意、千通、いふる、おぼろのふ、予斗、背の量、殊
千、進出千、生れ師友、千、く、い、け、ひ、ゆ、と、れ

止り、いふ、古学、後、は、い、つ、祖、翁、の、一、書、千、く、ら
す、さ、う、け、物、を、唱、者、千、さ、さ、千、さ、く、き、
を、受、く、や、と、散、百、う、消、息、遠、浅、の、志、け、き、玉、お、し
功、集、め、し、共、ひ、い、の、世、の、一、と、し、千、さ、ふ、ひ、と、俳、諧、一
葉、集、と、題、し、初、こ、の、を、よ、ま、う、さ、れ、も、か、れ、訂、
古、集、千、西、中、千、非、ゆ、見、る、て、わ、ら、く、村、肝、を、き、さ
み、功、功、舎、を、道、亮、千、つ、と、れ、ハ、三、年、ま、し、あ、ひ、
い、ふ、終、千、い、い、い、あ、う、友、人、坎、嘗、の、函、底、を、も、か、る、と
金、ふ、と、い、え、う、あ、れ、め、の、砂、千、は、ふ、て、大、事、千、此

書を讀さんよふ志の此仙境に入て遊んまおほ
まの如人の心法を捨ていふふ千の心を好く水
画き水千ちりて悦びて此世を寧ひ一生を名利
あやかりそふはけぬふ悦法を勉て未平悦法を
そふ好ましく世のちりて悦法をいふとそふを
乃悦をいふていふ悦の悦を悦す

文取丁亥仲秋

四解書湖中

凡例

- 一 巻目の部實文は寛文天和時代の分、四季とて千
- 一 帖の付のふら至真事元福の分、おぼゆるをい
- 一 手紙のふら、義母季の分、巻末に出す
- 一 同族、ききふ尺ふら、式は御の信或ハ御友、
- 一 子信、古書、所尺ふら、私を悦ふとて、
- 一 河ねの考證とて、手季ののま、
- 一 附合の約、定書、元福、年歴、
- 一 次、

もて来つる是る年玉ころり玉
於春く大哉春と云

えの巻

錦を言ひし折浩岩余の字枕

季吟勅進を記

和歌の法とよや出たの八幸子み

叶梅子牛と初言と母の包し

古以の梅や難波の二年 哉

梅うやまらるゝおらる不系右郎

三河一里は尾とすりぬまの駒

梅 板さきき若衣うれ女うそ

杉風言

さけけらる二月月中旬々川若子
去年ハとやそとくすき行よ次郎月
初この妻へついの崩れまらうひさ
暮すすくく白魚やとくく滑ぬ夜ふ
石川如銀生の倉中店子余はこれし
野んくし芥の飯やをて源川まて
おまらるこれ青泥坊屋の芥うやめ
千代の供とてやうおむ油
余もゆゑの朝喃跡す芥の食
出まらんやまき芥焼をんてま
さうめく梅子すて引風まれ
梅吹や白の換木の上ふあり

竹内一枝軒

青子白一梅花一枝のこゝろさる
ゆらき風や面くさくさく木 枝 後
餅やうとしくさくさくやまふ
ふふん善提の終を前ふれ
志く魚子價りくくくくみふれ
崖指く貧ある女様うす家
内裡解人形天皇の御字とく
右所八作の内ニ
貝よまき風よまきやあまの浦
姨石うづり可くくくすけ
指けんやまき木枯の終くく

山吹のちの葉の香のからら魚あふ
夏方知酒聖を始覺殊神
花うらふ世香海走らく食意
雨海くれば

草履の底おし指くむ山休く
雲の影よをたしくく和能月
花を踏の月も尺く思 新
くち山やお指くくくさく
箸の先うむ吹きくく梅海苔
紅毛く花うまうくくく
焼梅吹や志存のおく心
糸さくくくやめくさの足もつれ

吹風を尾細くあるや大さくら
艶あり奴を欠くや後高のさくら
夏を——其は多くと花の風
初瀬うし人しを欠く
うし人しやさくらさくら山櫻
花のうし人しを欠く
あすのうし人しを欠く
ま風うし人しを欠く
やのうし人しを欠く
てきらくし人しを欠く
初也うし人しを欠く
はうし人しを欠く

先初や直竹うし人しを欠く
あすのうし人しを欠く
氏とうし人しを欠く
道也の時
李下芭蕉を欠く
てきらくし人しを欠く
貞享元福年中
去立や新季古くも末五外
はうし人しを欠く

山家道十卷

誰堪了得身中事 碎却心頭のこゝろ
伊勢のうゑの山家も 本より子代のうゑ
嵐雪のうゑの山月小袖をうゑの
後やうゑの山家も 心ゆくゝのうゑの
やの峰波をうゑの山家も 旧友のうゑの
酒興のうゑの山家も えりのうゑの山家も
おのうゑの山家も
二のうゑの山家も けのうゑの山家も
あつたうゑの山家も けのうゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も

あつたうゑの山家も

こゝろはあつたうゑの山家も
あつたうゑの山家も
あつたうゑの山家も

大伴家持のうゑの山家も

人と大伴家持や 鏡のうゑの山家も
手つゝのうゑの山家も
えりのうゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も
うゑの山家も

紅梅や尺女をえつゝ玉の光
梅ありて梅のうらみは可(た)由
山里ん万葉を色し梅の光を
ちよ良し

阿古久らよの心そしつゝめのお
卓代志事月待

月夜たらや梅のうけゆく小山伏
山家

手拂うむきと梅のけりうけ
信安の山家とくやいふ物あり去る
よしほむかし葉とく石まゆけ
本千とあるは思ふありしあき

よあけのよのまみさ梨野也これをか
て日本村の石炭の三物とていふや
侍もは玉子のみ鏡ありしきんじ
めつ

あやうむらさきほく言はれ梅の光
一とをあのちや梅ねきしるる花
よしり師の侍を知人子あり侍は
はらみらのたぐ尺千ゆくとく
そを度をしつるれ

又もく梅の中し梅の光
侍あり

おもしろおもしろ梅の光

ちんく七の朝尺の物とて
物は白坊

花をみ遊ふ花れくしき友を
朝の葉と見くくちの葉と見
子花

花のちと後を上対の供を
あまの檜木とや谷の木のり
とてあまの木のりとてあまの

あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの

あまの木のりとてあまの

伊賀の上中野の古和會

くつ楳おしとくちよとくちよ
あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの

あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの

あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの
あまの木のりとてあまの

あまの木のりとてあまの

茅竹のし松尺さくくひの本筆

龍門二句

龍門の花や上戸のちきりせん
酒のさかかむむのさか
松 竹 寸 尺 五 里 六 寸

茅竹

花さくくひのし松尺さくくひの本筆
志くくくハ松の上さく有松竹

茅竹村

花さくくひのし松尺さくくひの本筆
大和をとり抑し葛城の松とこころ
よきのかはきくくひのし松尺さくくひの本筆

松のけいさいと松のけいさい

松のけいさいと松のけいさい

松のけいさいと松のけいさい

支那の東行録

此のころ松をよきと云ふ一具

尾張の門人より酒一樽本筆の松

活葉一冊おろしけるを人くくく

おろし

松のけいさいと松のけいさい

松のけいさいと松のけいさい

茅竹と松のけいさい

松のけいさいと松のけいさい

示門人

多し飽とす人子しを花やみし

三浦山の雪しし梅をり画し珠の像

まぢやききとおとろく舞のたれ

信や吟物ある

都の毛はくろふおちや花の雪

露はほろりまうして

西行の流と何し志花の池

鳥子似ぬ昔りよわし神さくら

りきくの文子

くくやうくくは寺の少女山根

花山

花の山ニ丁のほりぬハ大徳園

まゆまの海川の松をり訪

あそびくさす舟をり柳系

さくらもはなもわがをりまぬそぢ

ねぬまのさけこらよ

春やわがぬあそびれもろくひの前の葉

上池のせえすすけり竹りに人暮

あさわき物の音小唄のあそびんも

そらくかごとのの松をりよのみみ

より五葉は梅ハぬ花尺らららうま

古宮や岩はぬわの拾ひとる

あそびくさすもものを横らる

静きしつちのまに持ゆかしの

山家

朝のまを千流のふた休らふ
むらむあやうら長し一系さくら
歌よみの気をはりし山梅

二尺の園をおみり

うささねの御のそり浦のま

海子亭

残名のめうきくそくあふの
伊賀ふたは値のたはまのかみき良の
心き様の料は附られうきく供へけれ
一甲うらみふさむのるおのわ

扁うきほろむけやあさくら

似合しや豆のねりし梅うら

白鹿亭

去きのね花や木津や居造り
木のまにけしと静に休らふ

酒蔵亭

四方より花吹入きつゆの飲

海通うみちけくおむむくお

子枕やうらおあ久しき味

菊亭

手しやさくらしきおの香
花のうけ現やかきしれうら

上 碓 礮

ふるまふらふ少信あつむむ山楳

古郷このまみの園中よりその行を

めりて

まゝあや二條よりあえりあの子信

けりてあや思ひこまきこりてあつし

半信や花のけりてあやあつし

木白無り

とるけりあやあつしあつし楳麻

依見西岸寺

あつしあつし依見あつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

尚白と浪善下る

只一夜柳千たつし木幡のれ

古寺の柳千あつしあつしあつし

舟あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

あつしあつしあつしあつしあつし

重三

あつしあつしあつしあつしあつし

おとろしや馬子やあてし海苔の粉
お憶

蟬よりい海苔をい志の志をささく
海苔子里の粉

海苔けのみ隙足さるる海苔梳
あけけのや白魚走らふふ一寸

岸際下向うはるもあつ送る人
ゆゆゆゆ白魚送るれわうは

坂子園渡
ま〜〜もや思ふ目をあくはの細

よ〜野をいし海
飯貝や海子海子〜〜回り

古代や陸海こむまはけ
植るを同し〜〜船をいりりり
ゆ〜ゆゆゆゆゆゆ猫の志

田家
麦丸〜〜やつ〜〜志を猫の妻

猫の志牛〜〜や園のおちる月
膳所〜ゆ〜人平對〜

猿のま〜〜〜〜あ〜〜あ〜
山後末〜〜何や〜ゆ〜〜

悼呂丸
富陽〜〜〜〜積のす〜色料
す〜〜〜〜〜〜か〜〜〜

圓角扇を渡してをむす

お母もすこしおろそかおれ

は音規山

山寺の山——と昔よゆえに

旅のり程の振種や山屏

茶店二首

清——のけさるけさるけさる女
兼とくけさるけさるけさる女

陳菴の信宗波旅を起れ

古茶只あそれさるけさる女

茶中やおろそかおれ

おろそかおれ

おろそかおれ
おろそかおれ

おろそか

父母の志事りり

おろそかおれ

おろそかおれ

おろそかおれ

茶子画賛

おろそかおれ

おろそかおれ

下木亭

おろそかおれ

起よしし我友よりおめめりぬ

画體

裾山や如くははみはし

画體

あらしも山あふあふの能の如く

画體

山吹や字治の椿樹のゆほり

山あふやまのき枝の如

大和り御の村丹波市とわらふ

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

あふらしのれみさるるあふの光

梅歌

雪の降りしけり梅の花もさかす

雪の降りしけり梅の花もさかす

雪の降りしけり

雪の降りしけり梅の花もさかす

雪の降りしけり梅の花もさかす

雪の降りしけり

雪の降りしけり梅の花もさかす

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

菫の夏歌

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

菫の花は夏に咲く

夏にうつくしき刺をつらむほろむけ
菫子糸似たりや柳のよきの影
射もつらむ御沙多おきりれ
五月のあき捨我の翠のつらむそ
さみかた手抄物をや月の魚
海もや耳とすくある梅の海
五月のうも海もよるぬみふれ川
さみかたや龍燈のけり青右郎
さみかたはたやと皇衣をけりも料
こも三河おきりてさきぬのつらむそ
棧の宿や花もふ城の女控 海
名水八件の内二白

秋やほろば産や秋一るまらぬ
汗もやうし柳のよきの影
夕のほろば尺とさきやあきりて
ゆふの白く柳のほろば秋のつらむそ
秋風生る石のきりてうらみ 潤
路りてぬれ
いとや糸とふ布もく蟬衣
きりの河極片膝の骨月の影
夏もききひめゆもや后まの
箔押よとらふおきりてあきりぬ
園松 松下もふ玉衣素
梢もよとらふおきりてあきりぬ

小坂の中山より

いづらあつて山をたづねて下す

不卜の母道署

あつたけを治るひまはるの寺

甲斐文の初内とてあつたてふて逢

孫若吟

えりふらして我を待ててくるといふ

貞享文縁手中

ひらけりてくるといふあひぬ更な

なすたてるといふひまはるの寺

を待てて

浄佛の多き生れあふ麻のてり

滑仙や鼓多合する珠敷のてり

指提寺

この葉一とて月の下ぬるといふ

日光山

あつたけを治るひまはるの寺

若く人の儀

志はつてくるといふひまはるの寺

あつたけを治るひまはるの寺

甲斐文山中

山麓の願 牙 ち ち ち ち ち

ゆるりあつたけを治るひまはるの寺

青作—やま解の種と出つ—

通素門

五月十日武蔵守の御書
入し川崎をい送りし書し物子の
白きふせし

麦の種をいりしつゝ
麦の種やまゝに種をいりし

悼大巖和尚

梅をいりしおのふおふみし

女角の母と七の追慕

卯のおくといしおのふおのふ

一のちやといしおのふおのふ

尾張の東武下り

牡丹葉のくさけ

祝陳新表自画自賛

空のぬきやほのちの空

大坂

花子のちのちのち

山崎定徳の書

の海をいりしおのふおのふ

いしをいりしおのふおのふ

いしをいりしおのふおのふ

鳴海おのふ

ついでに我を置くの智はあり
帰一筆

なる名いかに風をこころをさすに
こゝれとやまはさしけくを雨城

大垣の跡を名 日光寺代家勅を
あふりて鹿後より宮田や紅葉を名

藤の家終よりけしし 藤より
嵐の山麓の麓よりや風を名

波塵
江戸より新田の麓より木下宮

雪野より
木下より新田の麓より木下宮

幻の住庵

先づの心持の木をありて木下宮

別田友

二つより千より水神より木下の角

子規の詩や黒戸の傍 庭

橋や川にありてありてあり

秋葉より降りの降りの二白

江戸の海士の矢先よりや郭を

ほろりて清ゆりてや木下宮

雲尺の鏡

時をくくしみの海の家を名

みちねく一尺の葉門同の三人が次

首柳舎

柳のやうに昔もやまのふ料理の百
そまきうやすうひ

とんまうと標やあは花も全

白けーや対向の赤の笑つ了あ

踏社園

白きしに胸もく標ののうみ外

次唐

海すの島まのたしーやけーのち

岱水亭

雨れしし思ふしーあふふ子蘭外
芦花

河一板植るたらし古柳うれ

奥州合の志川よ玉

あつひーしーまのああも風のち

早苗もも赤も色もあふりあうと由

みられくもあおしーの魚とあし先園を

の流もつしきまにしをまうしうて合

は白川もこぬれさ岩瀬歌ふむす信

早苗等弱る芳鹿と柳かの陽園は

かう故人と逢ふしー

風はのこーめやれくの白植吾

志のふの歌思ふの里とや又言柳の若花

とこ方ニあうしーやうそまは石の昔女の

昭牛角うろくけを渡り

浮らるる水に流るる時

くや人のぬきもあしく本宿の境

粒のまらるる流すも似よ本宿の船

届たの山家

登えくみてるの庭しるまきくも

清風亭

たしむよやひ返らたの山家の

牛のまや移るふけお粒のまきひ

水鏡亭

くもくやや笋とあつ人の果

甲の山家

まきや竹の子数すきと

木園亭

鳴すく牛根くりてみのと

坊屋

寺の人乃尺竹ぬきや持ぬ

又くまふ小粒の中はく竹松魚

うけをまきわく人も

強念をいさしおきん

わみの粒や

走る川

岸

大津浦

三十一

三十一 川に五月のめづりし
ゆき

さかしの海 跡 一 ちかきき

もみ川 百

五月の雨もあつたしとや 宿上川
風のまもとあつたらし ちかき川
夕のそやあつたしとや 五月の雨

経世の流る

△梅を折れわさし 向かちあつた

さかしの海 跡

さかしの海 跡 一 ちかき川
五月の雨もあつたしとや 宿上川
風のまもとあつたらし ちかき川
夕のそやあつたしとや 五月の雨

お月川くち作り

さかしの海 跡 一 ちかき川
五月の雨もあつたしとや 宿上川
風のまもとあつたらし ちかき川
夕のそやあつたしとや 五月の雨

五月の雨もあつたしとや 宿上川

風のまもとあつたらし ちかき川

夕のそやあつたしとや 五月の雨

五月の雨もあつたしとや 宿上川

風のまもとあつたらし ちかき川

夕のそやあつたしとや 五月の雨

五月の雨もあつたしとや 宿上川

風のまもとあつたらし ちかき川

夕のそやあつたしとや 五月の雨

三十一

やうきむかひの枝にあらはれし
首杯のゆき移るものさうし
いそむき悔み
もろき人なりたふむあはれ
秋ゆふ人もききくはるる
うきあはれさうし
移るもの枝に我をまかりし
輪我山
持後ゆきくやうし
立石寺
志のうらむる人きみの
雪常迅来

やうきむかひの枝にあらはれし
首杯のゆき移るものさうし
いそむき悔み
もろき人なりたふむあはれ
秋ゆふ人もききくはるる
うきあはれさうし
移るもの枝に我をまかりし
輪我山
持後ゆきくやうし
立石寺
志のうらむる人きみの
雪常迅来

夏の夜や崩れし竹 冷し物
きしれ端是といひのほろ 清き如

岐阜山より

味治や古井の清き水 気河む

般次の温泉の神古殿の八幡宮

道一きつてまね一方向あれま

湯を流すちりり冷月 石清き

弦うつさるや歯牙のくまの山

次二首

月を足くや物こころにや ぼたのる

月をゆれぬと菊のや ともはたの夏

明石和泊

増意やさつさふまをさるの月

まをさハ鏡子ゆふまの月

夏の夜やこころのゆるらに 静のき

夏の月 湯のゆるらに 赤坂や

晋の洞明をうらやむ

夏あつに昼や宵の 曇やたのむら

秋物言ふ人のほろをうらやむ

山も花もささるふ人 かなやる 雲の

井野水楼

春のなや水あきささる 浪の上

名月 花の影 雲の影のを見

侍人 雲の影の影の影の影

人しむる山ありけり席を設け
石をとりけり

又たふひあつては川の幸魚 鱈

くちしむる山ありけり

おもしろくわらひしき船舟に

お方全うの事千すのみけり 乙未

家名を海に二り

ひししとゆく扇や雪の峰

雪のふり目をうまきや西の鼻

枝あつて雪千うらうらぬ雪の山

雪のふり目をうまきや西の鼻

六月や峰千雪たかくありし

あや内や船の舟はもは 鯨

清洲や浪のあつては 松葉

みよふたつては物やみのまは 山

かきつねぬ湯屋のぬき 杖

松風のふり雪のふり 山

石川丈山の像

風うはるる山ありけり

雪

井原の山ありけり

小倉山雪ありけり

松林もふりては風の雪あり

遊力亭 二



さるみやはのまわくおお拍子
湖やみ山さをも情むさの峰
谷の口走矢り片の若りる
破のやうの歌や読むよすみ
也瀑餅ふ

わすれすはおねの中しんす先
よよあささうらもあそみの糸
よりさ木の方下つりけり
あそ人の小袖もいりやあ月干
十八楼は
はあしり月干あゆみあは涼し
清風亭

涼さを香やにそわすし
四神もあつみやみのあそみ
羽黒山
まあやもをもまきし南谷
すしやの三日月は羽黒山
文鏡子あ山の縁を踏むは
南も佛もあそも涼し
新花は清風亭
あつみ山や吹海うけさみす
寺名目今亭

野水新巻

涼しき花柳園之見ゆる位は

東武よりよき人こそ討ち

赤松の毛腰をうらみ

神の亭

涼しき花柳園之見ゆる位は

東武よりよき人こそ討ち

大津木節亭より

秋らきやうし海のうらみ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

春巻

霞原作虫換

みえらやれおましの位は

長貞亭

海らきやうし海のうらみ

松島

多しやちくちくちくちく

松らきやれおましの位は

野明亭

清涼のうらみよき心

霞心の村

霞らきやれおましの位は

三十一

横出横 杯をゆきゆきとたのしみ
おもひおもひとめりけり

きみとれりやまのちかきり 鶴のまに
李青く竹のまに 破さく石阿ふふ

外 赤人三信州まのちかきり
ゆきゆきやまのちかきり 鶴のまに

実的まに

汗のまに ちかきり ちかきり ちかきり

Handwritten bleed-through text from the reverse side

Handwritten bleed-through text from the reverse side

Handwritten bleed-through text from the reverse side

昔句秋之歌

寛文延享天和年中

張ぬふの猫をたふしつりし秋

秋末まきり 耳をもきり 鶴のまに

秋末ぬき 裏乞汗一や席の波

まきり ちかきり ちかきり ちかきり

内弓や 塔の一巻 男 七夕

七夕は ぬきぬき ちかきり ちかきり

名所八体の均二言

星舎の中や 鶴のまに 鶴のまに

八節や ちかきり ちかきり ちかきり

懐志社

四十

秋風を吹きながら影するは誰か
三月の月や秋の月より夕に紅く
月をこぼれぬをわが影をこぼれぬ
月をこぼれぬをわが影をこぼれぬ
多岐の山に

徳下す先月徳言中、奈良の宮
又徳をハ縁結ハ尺連ハはくしの秋
六分六分徳の二人年徳徳を討れた
古郷の安原を
今千里徳ハ山井の山や秋結ハ徳
角梨やねくも出羽のすまの取
画賛

秋風や吹きながら影するは誰か
三月の月や秋の月より夕に紅く
月をこぼれぬをわが影をこぼれぬ
月をこぼれぬをわが影をこぼれぬ
多岐の山に
徳下す先月徳言中、奈良の宮
又徳をハ縁結ハ尺連ハはくしの秋
六分六分徳の二人年徳徳を討れた
古郷の安原を
今千里徳ハ山井の山や秋結ハ徳
角梨やねくも出羽のすまの取
画賛

秋のきりぎりすのやうに戸のひやとさうり
くけりもあつて水生木やもみから射
武蔵の茶畑に雲をえとて一政以て
秋先とすさゆり
名月のあつちや五十一ヶ條
寺くくと名月の花や原向山
流るやに戸をえかれ糸山の月
木を伐るもとて口又とやうの月
有 蘭 草 菊 宜 止
穢まや肩に櫃を打うゝ衣
武蔵の砂や一寸ほくれ茶の香
霧のあつちや秋の口のく

又さうぬいりけりて火中如
後泉の秋物のゆきをえとてあつち
もとの松をまきとてさうり秋のくれ
あのもやあつちの秋を堺 町

茅舎の感

芭蕉の対ふりて鹽子雨をゆりて
とてさうりあつちの尺を打つて
ひれさうり北風をえとてや牡牛を回
秋の空を穿つて出ハ月下の雲を穿つ
夏草すさみ真蓮もあつち秋の香
秋のくれ男はほめものあつち
花も輝裸をえとてさうり

唐黍や軒湯の萩の煎らま
重陽

さうつゝやれふゆく三島や朽木を
近江路を通りけりけりおの
うらたふらふらの上のまゝ
行

利きくろふらん碓のひきま

貞享元禄年中

写海御堂

初秋や海と吉田の一みと

くつ秋やにみまうは坂帳の
直は津

久月やふらも昔は秋や
物や晴

葉海や佐渡子様ふららの川
合歌の本は

まきの母七十あるて
七

七
又七

七
何

四一
子

四一
子

く人々

七夕やとささの祝は係施

吊雨星

言水千一はしと龍南や若の上

神童亭よりし

七夕や秋をささむるにせぬの秋

富麻寺よりし

信節のふいふ死にのけり松

節の何の花をりやゆくの坂の弱り

鼠をり馬をり鶴をりみけり

物色をりいさよの昔をりあそびをり

更科の昔をり

兼 去海よりし ぬけりしとす

閉関

功きつはや春を預けりす川の垣

節色やうけり又春友あそび

和女角巻巻白

節の何をりあそびしとふをりし

九子の玉をりしとけりしは枝にお

りてあそび

物書く扇のふりさくしとれり

何の節をりしとあそび

秋涼しとあそびむけや瓜蒞り

兼 海の底にす物色をり

ひかしくと解をよみかえりて言わぬ

言教堂

可けんやと解をよみかえりて言わぬ

本初識のたしきとて言わぬ

言教堂

可けんやと解をよみかえりて言わぬ

現うし拾ふやと解をよみかえりて言わぬ

二尺の幅を

ありの字體をいれぬ

画譜

真嶽をきく可邊某方丈八仙の代り
まのゆきと古峰城を掛て峯天をお
きえ日月の光を雲門をひくくありむ
うふやういれおもしろく美奈も度す
詩人句をおきす才士又人もまを所
画工も筆を控えけり身一貌姑射
孔巧の神人ゆりて身法をよきむら
手画をよきむら

おのろは時 時 百多を中
お頼み向不ニを足ぬるおる
秋海棠西瓜の心つり
玉川のよみおる

ひよりくしと多波あけ一や女郎お
くす一何りの像

むく向を少才人多わふ
舌上の吟

是くこの本様を言ふ吟

言田醫師細川青虎傳

茶樹のつれづれのを枕

加賀屋入

不編のまやをけ入

小松のしよも

まほしき名やおねい
秋多や一板をやとや山の犬

観水亭

ぬれくゆく人かやーや市の秋

終の浪

浪の弓や小貝子よーる秋の巻

いろの浪

小秋ちきまきうけの小いしきき

画譜

きくもをこむさぬ秋のうねり

ひとひあやう遊女とあやう秋の月

着せ言ひ子のたきうけの秋

尺三

ゆいりや志とらう梅の秋

敷竹寺の院

門子入ハ秋路うきまけ白ひうれ

祝事お南の浪室よわの秋

きもあやうき秋きまけやう外

茶店

茶のきまけのつとににわあは

お女の画譜

枝少くけりうーうきまけ

きり市のちきまけあやう

きいろくけりうーうきまけ

け寺をて一とひのうきまけ

秋草茶

四十

夜よりけんとし句をる書きたる魚
子の繪子

秋のいろぬの味香盡くもあつらう
志川うきや終りたる蟹のまきうし
むきささき宵やみさしし虫のあつ
床よりあつらひのまき入りまきうし
郊外しし子習すむきまきうし

左田の神社

むきんやぬかやのふのまきうし
白梨ぬく秋のうきやまきうし
まきうしやむきうしうきうし
その戸をうしにむきうし秋の風は

けあつたうれ友とあつたうし

みの法は音をむきうし
晴鈴や取つたうし
秋のまきうし
先の名はむきうし
田中のけあつたうし
むきうし
むきうし
むきうし

田家

かろけけけ田向のむきうし
板のあつたうし

田家酒家

桐のあつたうし

藤の目もつたや昔のや
 稿すしめ藤の木をけわ
 青くてももつてふもあ
 かくさぬそわも業汁の
 女風おあしつる
 木曾塚の旧草ま在る
 子の戸をまわれわ
 松屋軒ま
 お柳のつらつら系も
 全昌ちま
 庭掃つてわわ
 画賛

藤波や原の末の時
 望田ま
 痛くはむかひ
 海寺のあまの海
 同子可くわ
 奈良ま
 いのち
 竹葉軒
 栗穉子
 故人

冬瓜や五子かぐる魚の取
あり皆

芋後小女西行あり八景より前
山中十景野暮激過火

かき火子餅中浪のいぢき心
嵐をの四角子渡り射

旅鳥二百十日の船支度
あのみとともを吹くあつとよ

次花よりふれ流下の暴風
之れ月やとわるとり橋のまはる

小瓶の中いし
雪のちかき月をききし茶の椀

秋風ひらき
三十九月あしきとをの松を抱

又の朝やまの片取も有月
やあしし人を休る月尺うれ

いさよのあしき手籠まき舟の中
一程をゆりて波のちかきさうか

いさよのあしき
ゆめくち二十七夜とさけ月

川舟やよぬ茶よい酒能有夜
すかすといふ尺さきこ有尺

古將の古家を経る
月やその跡の木はぬる下地も

五十一

おのゝ根木寺より
月とや一掃を南を掃ふ
寺にわがうきまゝと息ある内尺可ぬ
田かおろし二句
跡のまや掃くうけそ月を尺の
いものまや月の中里に焼 富
大層根成流るうけ
何事一掃を南を掃ふ
あけ中一掃を南を掃ふ
映燈山より
俵や掃くうけそ月を尺の友
いさよひもまゝと息ある内尺可ぬ

善光寺より

月とや一掃を南を掃ふ
仲秋の月を更科の里映燈山に慰め
うきまゝと息ある内尺可ぬ
ありし長月十三夜にありし如
木石の瘦もまゝと息ある内尺可ぬ
掃くうけそ月を尺の友
清少納言の掃くうけそ月を尺の友
とさるゝまゝと息ある内尺可ぬ
あきむ川や月尺の跡のまや掃く
月尺まよ玉ほのまゝと息ある内尺可ぬ
尾塔下

月を名をつてみよきやいもの神
蛇山

義仲の六斎の山に月出
香江のゆ神

月信一遊のゆきと砂の上
敦賀夜泊

名力やかよふゆきとゆき
候

月のみる高き角力とあつら
仲秋の夜つとつとゆきとゆき

いづれとゆきとゆきとゆき
西のちのちをいづれとゆきとゆき

阪下きよ子さき引楊子たつとゆき
ゆき

月川のとげをさしゆきとゆき
木因亭より

ゆきかや月と菊とゆきとゆき
斜嵐亭

産をゆきけいあまゆきとゆき
ゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆきとゆき
ゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆきとゆき
ゆきとゆきとゆきとゆき

尺一斗燈籠の心も安く一付くぬかの白
ちの妻髪を切る糸をさけけし
心も今更アヤ
月さひよのちり葉は影をぬ
悼を流て空は
そ雲を羽是なりをほの月
片力たぬらんこころも涙の月
通題
夏うけそり月見おほみ
お出の候り
いさよひや海むらうほの月の園
既や賦二首

預めく月さへ入よ海佛堂
安くとわきういさよふ月のち
正徳寺初會
月代や膝すまを玉音のや
古寺觀月
月尺さるゆきき鳥や
月見の籠
米くく友もこよひは力の家
義仲寺
三升ちり門たりまやふの月
名月やゆきのまふ七小町
名月や吹きあはぬ雪の塚

夕月や朝霞空を巻く
名月や雲を筆架のけりし
名月やそのたぬる門洗坊
諸見

夕月や朝霞空を巻く
名月や雲を筆架のけりし
名月やそのたぬる門洗坊
諸見
夕月や朝霞空を巻く
名月や雲を筆架のけりし
名月やそのたぬる門洗坊
諸見
夕月や朝霞空を巻く
名月や雲を筆架のけりし
名月やそのたぬる門洗坊
諸見

石山寺の清くは

松樹は三のよに月おみぬ
松の長板
くくのたひ起ても月ゆ七つのか

深川

名月や門をさし
柱ハ松風松風を削宅位ひ
曾良成水と物敷ふを後
月の上をほひひとさ

裁
とを松葉を柱のひ

深川の末と木と

川とく此川にや月め友
いさうひえしつりての園のそめり

嵐蘭節七日詣暮

尺一やそそりて言の三々の月

東照傳

入月の法をれめ四隅のまき

感水亭より

新待中菊の委仕する巨勢車

信繁の山中より

名月の花うし尺一了綴るまけ

名月を林のきりや田の曇

義忠虎より

とく月夜より一燈の力も十の里

信吉の市より

井原より分ふ多る月尺一れ

畦止亭題有下送宛

有す志や旅懐を吹め修

女柳亭より

秋もさわさつとて南平月め歌

名月や池をめぐりて夜をまのり

山守より心の底やあめ月

わのたもらば角れ氣をたぬの内

かけをりや先思ひいら物あへ

棧や心のらをりてむ草をり

尺野亭翠亭

甲子うろ枝の木持ぬかきも
志小柿や一口ハ喰ふ猿のつ

望田素波可休亭

祖父と親を子けはや枝みん
櫻や侍おぬ白子の座きし
何喰ふか家ハ枝の柳一り
枯を孫守膝くふ久くわ菊のち

草薙の両

起ゆうろ菊ののりしよは河

左柳亭よし

ちやくきり丸もちりりわ菊

蓬にぬらぬ相まじり菊を
龍山の雲をひらきりかき手海は

節れをさすめくねたはるくれ

ととまじり粉ねのぬ手流らすわ

あしあのをとて

ひさすひのり花のち菊を結る菊

山中の浪ねよし

山中わつ菊をたきしぬほの自心
ぬ行亭よし
瘦みゆのうろくきふ菊のつちみん
と菊のちかたをひらくハぬのこ
田かきり

縮こぶの焼もめりし 菊のくさ
望田の何し 木匠醫師の兄の亭子 招
来しにさうりつをたし 酒をぬれ
あしれりつ 雅業八咫の才 茶室をす
ひて 芥子 けい
坪も末も 砂も ぬ菊の 繪も 菊
九月の乙州の 一掃を 携り 赤いれ
その戸や ありさうくも けい 菊の 酒
尺も ぬれ けい やの ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ
八丁堀 けい
菊の ぬれ や 石屋の 石の 百
大門通 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

五十一

芳のわ 古 抱 店 の 背 戸 の ぬれ

園女亭

きくきく ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

菊のぬれ や ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

きくきく や ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

五十二

以上の破産をわらうて

秋十とを却ては知をさす古心

懐於子

義節のうらるる秋の風

秋風や藪もさける不破の岸

一笑追善

懐くくけ香泣あり秋の風

進中

春（とらえつれまも秋の風

牛秋屋をぬめぬ秋の風

秋言歌集

石山のうらるる秋の風

贈柳天号

柳の木はさ葉まはれ秋の風

中村をこく

秋の雨侍のたそふ秋の風

秋をの吹くも高し栗の球

中村の歌

ものりハ唇さみ秋の風

昔秋の香きき

秋風や柳をくこくさるる

伊勢紀行の跋

西 東 あまのれさきあり 秋の風

悼松倉翁業

秋の風を吹く如く 葉の枝

野水は旅舟を流す

尺送るはくちくちやきひ 秋の風

物置亭題板字

乳麵のこぼれ 夢をみる夜更けの月

麻呂神前

此 ねの 実 生 せ 代 や 神 の 秋

菊 不

あつとく おくくつ 果は木るの秋

さうさく 秋よ 秋ち ねいとい 隆

種の後え

さひし ちん けい なる 膝の 涼の 秋

秋の行巻

松 病 や 霜 降 くる 秋の 山

小島木浮桐実無り

秋のそとく しのとく 東の 小松川

秋の情

此 秋を 何して 幸なる 秋の 月

車窓亭 二首

秋の花を 歩崩し 秋の 可れ

あまのれさき あり 秋の 高

花をかりおろす

まひしきとてつとれぬう桐一葉
夕月や初月も片しきさむいし
秋のくけ家ま亭らる中 柱
はけ井伊家の邸と海ちを若くし
侍さるるし家ま亭らる依てかれう
を待らちの休ありとて手の中は
まの今もけし侍家ま亭らる

散句ありて

寛文色會了お手中
舟の鏡少きなり尺さや月の正有
ゆき雪や火のぬるく村時る
戸田村古吏亭
一しはけ孫や降く小石川
や川く時雨傘をさ提て物倍
大吹竹しきや志くけく小豆食
むつ時向てれしれ断のふあふ
その燈てもあ志はめるわあを
深川を板の意
梅の春の浪をちくけけ水つね平依

つらねてあやきのふいこくふくとけ
白山の倉おのり鳴りあやきし

茅舎買水

冰若く偃嵐の咽もろくろほきろ
小舟あや手習ふ人の辰さき
坊よりともなひにけむね

龍安寺

山よりよふあふかきぬん青まよ山
白炭わかしの浦高志の筑

張笠の尻

女子ふもさしに雲袂のすくろ
をのりれり嘆ハ幸の若舟

浪のちとさややぬりてくろ
此のさね松原を園の葉しれ

耕月亭

もろとやの上戸けあやのれきろ
時あまやもろくろくろ松の空
あさきすしつれき重ハ小紋
是れを何とゆふもろの空

あまおろれしる人の汗

志原れもややあさの若月のさめ
望の松や咽あまおろれしる
雪もあまハ南の枝やあささ
みちたぐり各所の内猫山

相成のめし志海のうさうられ八志海く
とふさうあやせしはに

大海のうさう難於ん言時雨

是のほろろうし時雨のあひさ

望もあふあふとていさうのこいゆと

字状大もいさうしあねのあ

時雨ゆくや舟の帆張子取けて

難舟あふし時雨の生屋か

人の海へとてめてゆえ

さう時雨舟の字もあ時雨の

とやこふしとてあはれのむく

らうやとていさうれたくとも袖を

ちたーまこおとま里河をやた人
旅人よとあはれをいさうあ時雨
一尾船をいさうあはれをいさう
伊賀山甲

時雨向指大いみのをいさうきこ

四里のうさう

志くうさうや田のあし株の思ひは

美濃雲升高難から作のあはれ

作のあはれをいさうあはれ

あはれをいさうあはれ

命のうさうあはれをいさうあはれ

うさうあはれをいさうあはれ

大井川

好六亭

いふもく人もきよたてらむ
新粉のむねこもきし
山崎の井出のきし
学危

人しを母申さるる
支原亭

口切り 唄のきし
鶴子や古きわのき

慈回

きのふとく 枯る餅ふや
きのの後のき

花のれ枯る
花のれや枯る
花のれを
花のれを
花のれを

大根の
大根の
大根の

消息

口と
口と

言角子
言角子
言角子

この
この
この

あつらぬいふをよめ

母かゝら又そや枯木の枝の長

大徳をこころ

三尺はふとあつらぬ木もあられ

月の輝きこころの光思ふに松の心

をさすわ

そのころの海や海をたもみみら

あゆみはあつらぬ地をこころにたたく

既に百年の相ふふとあつらぬ奉

加の輝よ白竹樹のこころよ去石光り

とあつらぬ木を物つては殊勝に

受付つるれは

百季はあつらぬきをこころの光あつらぬ
あつらぬ海配あつらぬ海をこころに
振る可のあつらぬれこころに海
あつらぬ海をこころに海命海

消息

海を海や海の中は海玉外

海を海

あつらぬ海の中は海玉外

あつらぬ海の中は海玉外

あつらぬ海の中は海玉外

海玉外

あつらぬ海の中は海玉外

軍の端のふみをおろしよふのふり
ふらふらふらふら

あふふふふ田畑のふらふらふら
樽七ふふふ

白里をささぐささぐささぐささぐささぐさ
らふ人ある家僕何可く水木のふらふら
あふを告ぐあふを告ぐあふを告ぐあふを告ぐ
奴阿段の功を何くささぐささぐささぐささぐさ
をささぐささぐさささぐさささぐさささぐさ
物ハ何ふささぐさささぐさささぐさささぐさ
上智の人何くささぐさささぐさささぐさささぐさ
はゆふふふふふふふふふふふふふふふふ

ささぐささぐさ

先従く梅をささぐさささぐさささぐさ
子川亭の梅のささぐさ
おしふ伊吹をもささぐさささぐさ

防川亭

あふを梅の梅のささぐさささぐさささぐさ
熱白梅人亭の梅のささぐさささぐさ
あふや白き梅のささぐさささぐさ
ささぐさささぐさささぐさささぐさ
先樹後の梅のささぐさ

ささぐさささぐさささぐさささぐさ
ささぐさささぐさささぐさささぐさ

此里をばはひてふとていせり 院の法
門の巻をばもてはきりてしりし
美下らふり 里人のかりけりしりき
けりしりきりしりきりしりきりし
ともてりしりきりしりきりしり
梅はくはりしりきりしりきりし
あふりしりきりしりきりしり
きりしりきりしりきりしり
河下の屋店をし
相葉をばきりしりきりしり
古田の解をし
きりしりきりしりきりしり

孫弓やきりしりきりしりきり
二河ふ風きりしりきりしり
けりしりきりしりきりしり
ねきりしりきりしりきりしり
李のいしりきりしりきりしり
うりきりしりきりしりきりしり
元起和尙をしりきりしりきり
きりしりきりしりきりしり
あきりしりきりしりきりしり
化れり父の追善
袖のしりきりしりきりしり
隆朝の遺業をしりきりしり

葛白く洗ひまゝのまゝの白

花田

海をくく鴨のあつはりの白

葉名古屋澤うき

久牡丹をさるよまおほくま

一ひふのさるまゝ川子

秋さるハ 松風の里 味陸を

想のしり 望さる ちの降白

星崎お園を又まわ ちの

杜園をけひるをす

響ひさし尺けさる 櫻の味

麓子けさるめく 鴨の足

杜園不幸と作良吉崎とあう響

花をさるまゝ

響ひさし尺けさる 櫻の味

阿中の鏡

すまぬゆくわさるわさるけけ

生さるひさし尺けさる 海嵐

花をさるまゝ

花田

一ひふのさるまゝ川子

片鏡やすま梅。回井の初

瓶さるわさるわさるわさる

十三有のわさる海の花

幼き力なき人の心はなほまろくあり
 曾良合う一はあはれ世にあり
 屋を下りてあかきあかき付つとるお
 ちるの心物なまふけを事外とす
 だすけやあふまをてあはれおとす
 けをたかく性良きとあはれ人
 ちとるこころのこころのあはれ
 け行く
 君火をくけえお物又さるをたけ
 秋をわが菊冷種り種り
 抱月書
 市人より見文心書り
 三

幼き力なき人の心はなほまろくあり
 曾良合う一はあはれ世にあり
 屋を下りてあかきあかき付つとるお
 ちるの心物なまふけを事外とす
 だすけやあふまをてあはれおとす
 けをたかく性良きとあはれ人
 ちとるこころのこころのあはれ
 け行く
 君火をくけえお物又さるをたけ
 秋をわが菊冷種り種り
 抱月書
 市人より見文心書り
 三

閑居箴

海の底にいしく海にさびくよりの世

明海釋業言亭

奈中しひまのまぢやきよの世

熱田伊勢守

魔直や張く清く一巻の赤

古事の統むを思ひつ越人子孫

二人尺一巻をたしむる海

懐信濃郡

空あや移るを世の所

いさしひまを尺子精小

山中の子供と遊び

世の多平 鬼の波は怒つと

元禄己亥 奈良大佛再興

とらをやり川大佛お

初雪や 聖小僧は

村のさきの住人と

経る世の後志

あつと大津松

老尼の海子

知るはつと

少将の危は

出水

比良三上

大空や雲の心とく住菴の家
三秋を越え深川の軒庵を過ぎ
旧友門人白くにむすう末の心も
可いこと付る

とちのくちあつてやわかの枯尾花
りけめくむ穂もさるのりしり

小町の画額

たつとさやを海ぬらふみのよ
早菴居士の

本松のあつてぬらふかのよ
深川大橋まじりて

秋をわらけのりしり橋の上

秋をやあ心の葉たなむかて

竹の画額

あまみそいそ中の竹の葉まきか
湖あつて是のりしりはさのわ

おれ月のけあ武はうさる

おれ月のけあ武はうさる
深川大橋まじりて

あつてやあ心の葉たなむかて
秋すのりしり橋の上

かつとさやを海ぬらふみのよ
去居旧友子を送る強余はうさる
あまみそいそ中の竹の葉まきか

かゝ能くわがやの瘦り寒の井
肉花の富より減るんをいれ入
からほろろ河老のゆのかいつく
季とぬぬさるる字難とぬぬ
自好歳
おとよんは数もいふ老の言

画體

わく季やゆゑ親おしねるる
くわく(と)季より人や古曆
季とぬぬ三人よるる字難とぬぬ
煤採やさうゆへ前のさうさ
年の市路さうさゆへもわ

月やへのさくさくきりし季のらた
結ぶゆへさくさくわゆるの結ぶるる
旅り

煤採の秋の木下けぬるる
さくさくわゆるの結ぶるる
炭の言の詞

古依りや篇の結ぶるる
ぬぬ人よりゆへに年はさ
ゆへにゆへにゆへにゆへに
と百老(え)旅の結ぶるる

まやまの結ぶるる
さくさくわゆるの結ぶるる

船よきを 海松を 舟を 行かば
酒のふたつと人の縁を

月夜に 舟を 海松の心ひくく外
貞徳宗徳寺武の画像

三つおの 舟の 天工を けえく心匠を
舟の 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を



舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を
舟を 舟を 舟を 舟を 舟を 舟を

花形画漣とゆれに新正のあまは岸
 餅の花やかきしきささるよめり
 大事の初めすみりゆひき
 梅千子うらふききりゆき
 幸崎初庵
 翠色の初向よ跡越り松花律
 粟津晴嵐
 さきゆふ人のほくら市の意
 矢橋胸帆
 夕のちみ赤石の浦を帆の舟も
 比良言香
 さきゆき白衣のて物は良の香

石山秋月
 はやさぬはすよけぬ秋の月
 濃きの文思
 香ふらふかきぬ網の舟の納
 望月最良
 きよ文かきぬ舟よ斤便宜
 三井悦隆
 香ふらふけいけい花の種
 右八景八宗房の舟の舟人よ云
 九のときをきき秋市中の位を吟く屋を
 深川の香ふらにゆきき長安の舟人よ利の

此の山よりとて定まらぬもの行跡とて
いひける人のかゝる覺ゆるべきものも
ある

案の戸々の原を市原とて名くする
消息

三十里尾張大相のとき一里
画勢

存のむらよふ海風をよおの残念
けし衆を新くする事ありしかの真
本并にうらうら

深川や相らぬ世の世の世のこひ
深ゆきとて鳥さしこむや魂すれ

あつひ世の世の世を造るいふ事あり
河の深みよけぬ世の古 相

Handwritten text in a vertical column, possibly a signature or a note, located within a rectangular border on the right page.

二五八
全九册

